

## V 概況

### 1 畜産業務

#### (1) 畜産の概況

農林水産省の食料需給表によると、令和6年度における食肉の需要量（国内消費仕向量：概算値、以下同じ）は、前年度からわずかに増加し660万4000トン（前年度比0.8%増）となった（図1）。品目別では、牛肉は120万3000トン（同3.2%減）、豚肉は267万トン（同0.6%増）、鶏肉は267万7000トン（同3.0%増）となった。また、牛乳・乳製品は1165万7000トン（同0.4%減）、鶏卵は252万トン（同0.6%減）となった。

食肉の需要量を品目別に見ると、牛肉は、物価の上昇による消費者の生活防衛意識の高まりや為替の円安傾向などの影響による輸入量の減少もあり、5年連続で前年度を下回った。

豚肉は、消費者の節約志向を背景とした牛肉からの需要のシフトなどから、2年連続で前年度を上回った。

鶏肉は、消費者の節約志向や健康志向の高まりなどから、前年度を上回った。

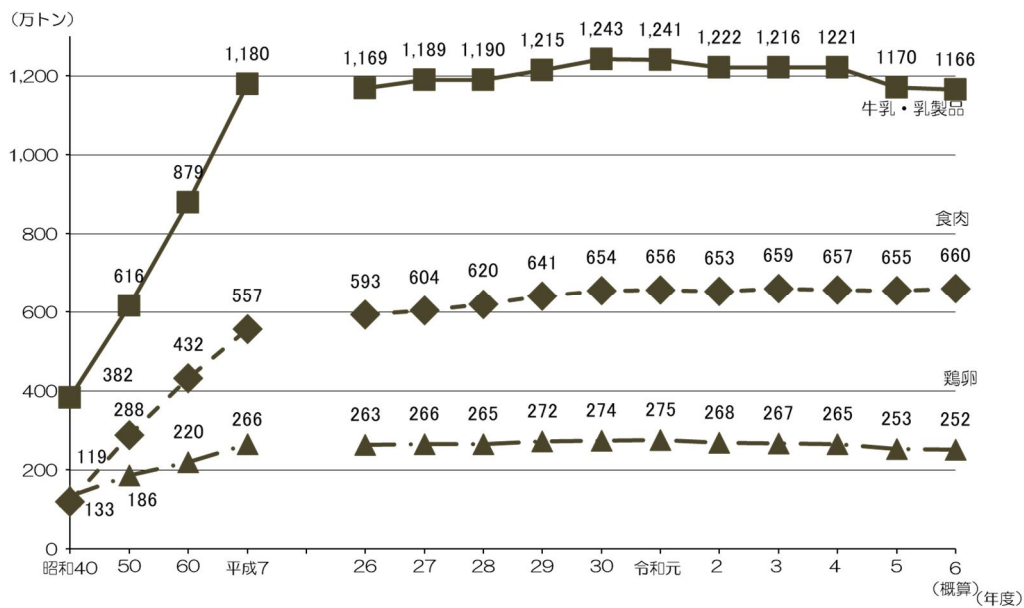
牛乳・乳製品は前年度の乳価改定に伴う製品価格の値上げ等による需要の減少などから、6年連続で前年度を下回った。

鶏卵は、令和2年度以降、新型コロナウイルス感染症や高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）の発生による影響などにより、5年連続で前年度を下回った。

また、食肉の1人当たりの年間供給数量は、34.3キログラム（同1.2%増）となった。このうち、牛肉は5.9キログラム（同3.3%減）、豚肉は13.2キログラム（同0.8%増）、鶏肉は14.9キログラム（同3.5%増）であった。また、牛乳・乳製品は90.7キログラム（同0.7%増）、鶏卵は16.2キログラム（同0.6%減）となった。

なお、「食料・農業・農村基本計画」（令和2年3月31日閣議決定）においては、令和12年度における望ましい食料消費の姿として、1人当たり年間消費量を牛肉6.9キログラム、豚肉13キログラム、鶏肉15キログラム、牛乳・乳製品107キログラム、鶏卵18キログラムと見込んでいる。

図1 畜産物の需要量の推移



資料：農林水産省「食料需給表」

食肉の生産量（概算値、以下同じ）は、350万1000トン（前年度比0.1%増）となった（図2）。品目別では、牛肉が50万5000トン（同0.6%増）、豚肉が127万8000トン（同1.5%減）、鶏肉が171万1000トン（同1.2%増）となった。また、生乳生産量は737万3000トン（同0.7%増）、鶏卵は244万4000トン（前年度同）となった。

牛肉は、乳用種が乳用牛への和牛受精卵移植技術の活用などにより減少したものの、肉専用種および交雑種が、畜産クラスター事業の取り組みの他、繁殖雌牛の増頭及び乳用雌牛への受精卵移植の活用などによりそれぞれ増加したことから、全体では前年度を上回った。

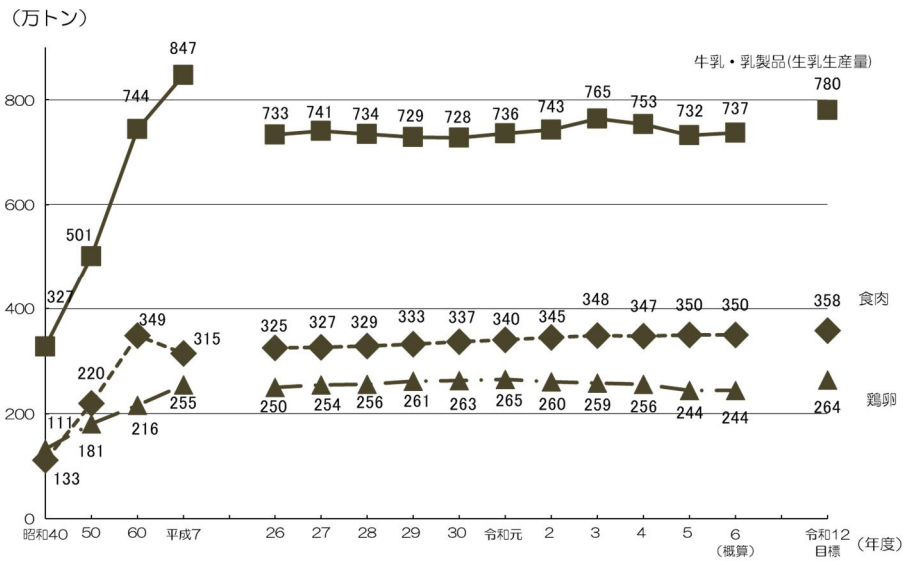
豚肉は、猛暑や疾病などの影響による出荷頭数の減少などから、前年度を下回った。

鶏肉は、消費者の健康志向の高まりや根強い国産志向による堅調な需要などを背景に13年連続で前年度を上回った。

生乳生産量は、生乳需給の緩和等を背景に行われていた生産抑制の見直し等を受け、3年ぶりに前年度を上回った。

鶏卵は、前年度と同様にHPAIの発生による影響などから、前年度同となった。

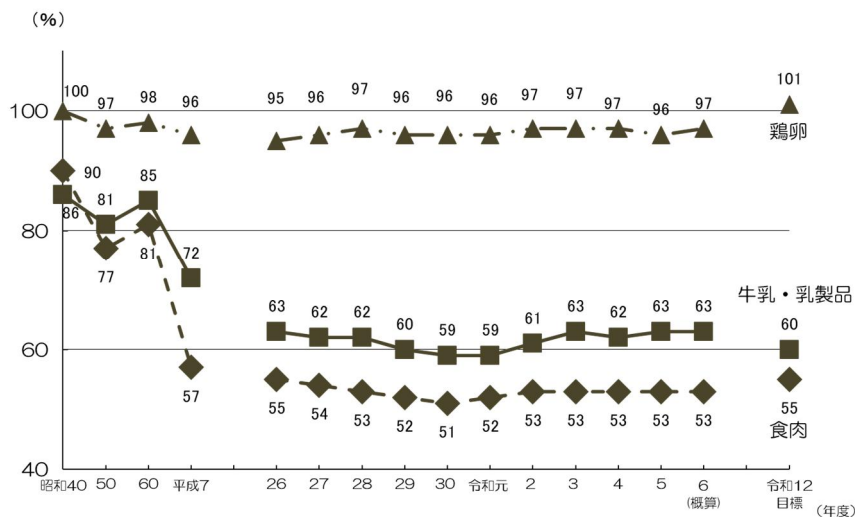
図2 畜産物の生産量の推移



資料:農林水産省「食料需給表」「食料・農業・農村基本計画」

このような状況の下、食肉の自給率（重量ベース：概算値、以下同じ）は、前年度から変わらず53%となった（図3）。品目別では、牛肉が42%（前年度比2ポイント上昇）、豚肉が48%（同1ポイント低下）、鶏肉が64%（同1ポイント低下）となった。また、牛乳・乳製品は63%（前年度同）、鶏卵は97%（前年度比1ポイント上昇）となった。

図3 畜産物の自給率（重量ベース）の推移



資料:農林水産省「食料需給表」「食料・農業・農村基本計画」

(2) 畜産業務関係年表

年 月 日	事 項
令和6年9月11日	「畜産経営災害等総合対策緊急支援事業実施要綱」の一部改正
令和6年10月16日	「畜産経営災害等総合対策緊急支援事業実施要綱」の一部改正
令和6年12月13日	「畜産副産物適正処分等推進事業実施要綱」の一部改正
令和6年12月18日	「国産牛乳乳製品の需要拡大・競争力強化対策事業実施要綱」の制定
令和6年12月27日	「和牛肉需要拡大緊急対策事業実施要綱」の一部改正
令和7年3月6日	「ランピースキン病まん延防止自主対策促進事業実施要綱」の制定
令和7年3月7日	「畜産特別支援資金融通事業実施要綱」の一部改正

(1) 野菜の概況

ア 需給動向

農林水産省の食料需給表によると、野菜の1人当たりの年間供給数量は、近年減少傾向で推移しており、令和6年度（概算値）は83.3キログラムと、前年から1.4キログラム減少した。また、野菜の生産量は1048万トンとなり、前年度から41トン減少した。

一方、野菜の輸入量は生育期の高温、干ばつ等により不作となったたまねぎ、キャベツ、しょうがの輸入量が急増したことから、全体では292万トン（生鮮換算ベース）と前年度より14万トン増加した。

また、令和6年度の野菜の自給率（概算値）は、前年度を2ポイント下回り78%となった（表1①～③）。

表1 野菜の需給動向

① 令和6年度（概算値）

（単位：断りなき限り1,000トン）

類別・品目別	国内 生産量	外国貿易		在庫の 増減量	国内消費 仕向量	1人当たり供給純食料				
		輸入量	輸出量			1年 当り た 数	1日 当 た り			
							数量	熱量	たんぱく質	脂質
						kg	g	kcal	g	g
野菜	10,477	2,920	21	0	13,376	83.3	228.3	62.8	2.8	0.5
a. 緑黄色野菜	2,304	1,554	3	0	3,855	25.3	69.4	19.1	0.9	0.1
b. その他の野菜	8,173	1,366	18	0	9,521	58.0	158.9	43.7	2.0	0.3
野菜	10,477	2,920	21	0	13,376	83.3	228.3	62.8	2.8	0.5
1. 果菜類	2,713	1,549	6	0	4,256	25.7	70.4	21.8	0.9	0.2
うち果実的野菜	594	55	3	0	646	3.2	8.7	3.3	0.1	0.0
2. 葉茎菜類	5,537	865	7	0	6,395	39.2	107.5	25.5	1.5	0.2
3. 根菜類	2,227	506	8	0	2,725	18.4	50.5	15.5	0.4	0.1

資料：農林水産省「食料需給表」、②も同じ

注：輸出入は、暦年で計算している。なお、令和6年10月1日現在の人口は1億2380万2000人である。

② 令和5年度（確定値）

（単位：断りなき限り1,000トン）

類別・品目別	国内 生産量	外国貿易		在庫の 増減量	国内消費 仕向量	1人当たり供給純食料				
		輸入量	輸出量			1年 当り た 数	1日 当 た り			
							数量	熱量	たんぱく質	脂質
						kg	g	kcal	g	g
野菜	10,888	2,777	24	0	13,641	84.7	231.4	63.4	2.9	0.5
a. 緑黄色野菜	2,362	1,459	3	0	3,818	25.0	68.3	18.8	0.8	0.1
b. その他の野菜	8,526	1,318	21	0	9,823	59.7	163.1	44.6	2.0	0.3
野菜	10,888	2,777	24	0	13,641	84.7	231.4	63.4	2.9	0.5
1. 果菜類	2,801	1,475	7	0	4,269	25.6	70.0	21.6	0.9	0.2
うち果実的野菜	611	52	4	0	659	3.2	8.8	3.3	0.1	0.0
2. 葉茎菜類	5,764	800	9	0	6,555	40.1	109.5	26.0	1.5	0.2
3. 根菜類	2,323	502	8	0	2,817	19.0	51.8	15.8	0.4	0.1

注：輸出入は、暦年で計算している。なお、令和5年10月1日現在の人口は1億2435万2000人である。

③ 食料自給率

(単位：%)

	S40年度	50	60	H7年度	17	27	28	29	30	R1年度	2	3	4	5	6 (概算)
供給熱量ベースの総合食料	73	54	53	43	40	39	38	38	37	38	37	38	38	38	38
生産額ベースの総合食料自給率	86	83	82	74	70	66	68	66	66	66	67	63	58	61	64
野菜	100	99	95	85	79	80	80	79	78	80	80	80	79	80	78

資料：農林水産省「食料需給表」

## イ 価格動向

令和6年産の指定野菜の需給・価格動向を見ると、暖冬の影響で収穫が前進気味でスタートし2月頃までは葉茎菜類を中心に潤沢な出回りとなったがその分、切り上がり及早まり、さらに3月の低温により春野菜の生育が停滞したことから、4月～6月にかけて価格が高騰した。夏場に一時的に価格が下落したが、夏から秋にかけての高温や大雨、それに続く寒さと干ばつより多くの品目で生育不良、樹勢の悪化がみられ年末にかけて、大幅に価格が高騰した。

たまねぎは前年に引き続き夏場の猛暑の影響で北海道産が小玉傾向となり、価格は平年を上回って推移した。

月ごとに見ると、令和5年12月～6年2月にかけて、暖冬によりはくさい、キャベツ、だいこんといった野菜の入荷が前進気味となったが、3月以降は産地の切り替わりと同時に低温の影響で生育が停滞し高騰した。

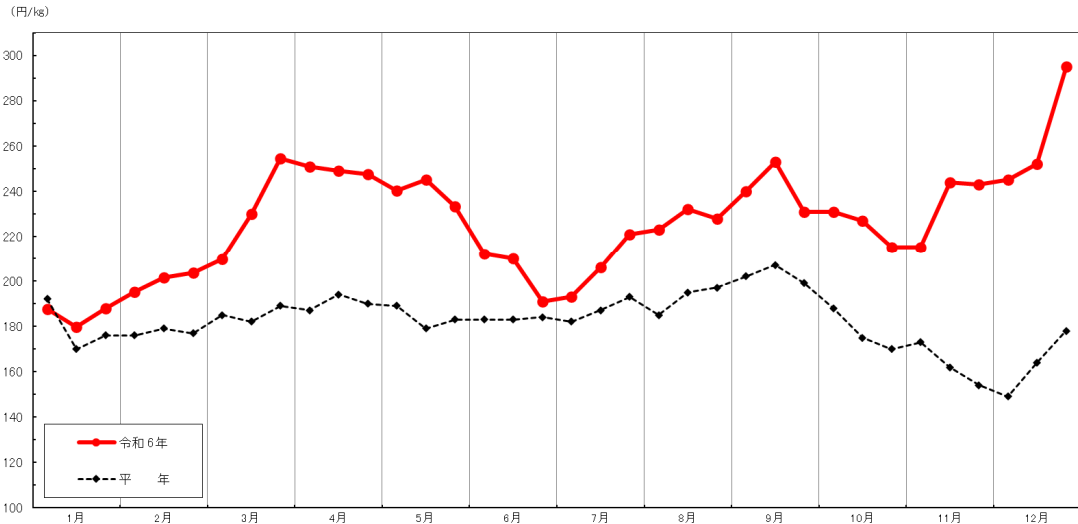
4～5月は九州産をはじめとする西南暖地の切り上がり及早まったこと、2～3月の低温、多雨の影響で東北や関東の出荷が遅れた事により端境ができた。果菜類も3月の曇雨天・低温の影響により着果不良や小玉傾向が見られた。

6月以降、北海道産に切り替わったにんじんや高冷地のはくさい、キャベツ等の出荷は順調で価格が下がったものの、果菜類は高温障害、病害虫の発生により入荷が不安定だった。

9月は、夏場の高温、多湿、豪雨の影響が大きく、生育不良に加え、病害虫の発生も多く、葉茎菜類、果菜類を中心に全面高となった。

11月中旬～出荷される多くの品目は夏場の播種、定植時期に高温・干ばつ・大雨の影響を受けており、根の活着が悪く、台風や豪雨により流出した苗もあった。特に葉茎菜類では小玉傾向となったうえに高値から早取りする生産者もみられ、キャベツで平年の4倍、はくさい、レタスで同2倍など高騰し、加工業務筋を中心に輸入に切り替える動きもあった。西南暖地の果菜類でも夏秋期の高温、11月の天候不順、12月の低温の影響により生育不良や小玉傾向となった(図4)。

図4 指定野菜(14品目)の卸売価格の動向(東京都中央卸売市場)



	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬			
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215	215	244	243	245	252	295
平年	192	170	176	176	179	177	185	182	189	187	194	190	189	179	183	183	183	184	182	187	193	185	195	197	202	207	199	188	175	170	173	162	154	149	164	178

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

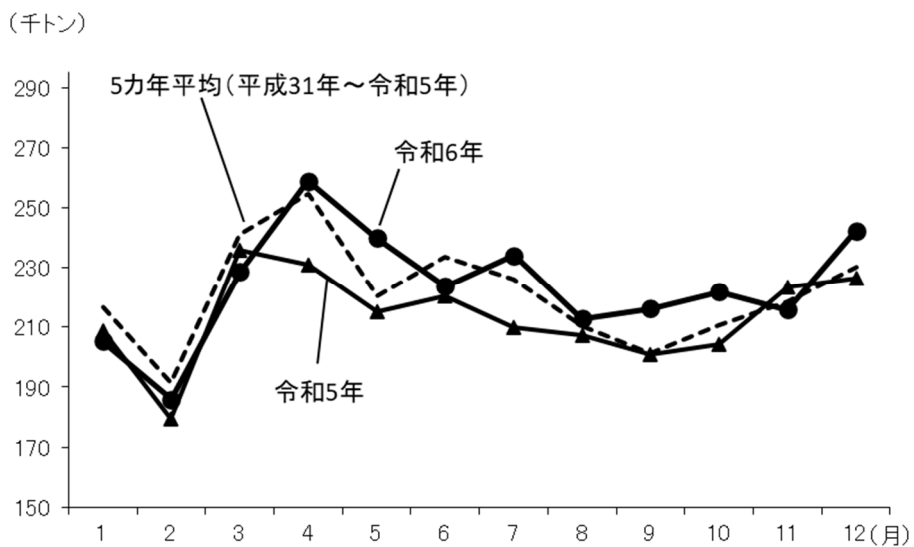
注：平年とは、過去5カ年（平成31年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

### ウ 輸入動向

財務省の貿易統計によると、令和6年の野菜の輸入量は前年比104%の268万5352トン（単純合計ベース）となった。

生鮮野菜、冷凍野菜、乾燥野菜、酢調整野菜、トマト加工品の輸入数量が前年を上回り全体として4%増とやや前年を上回った（図5）。

図5 野菜総量の月別輸入量の推移



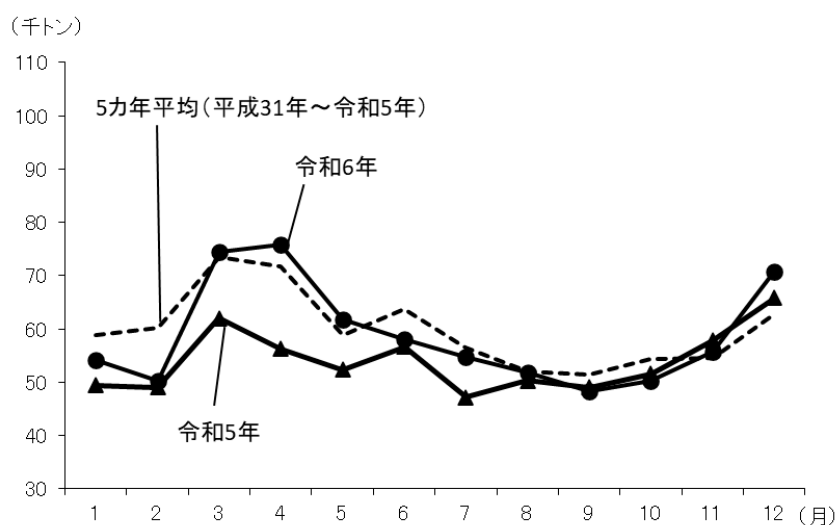
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

輸入量が多い生鮮野菜及び冷凍野菜の動向は以下のとおりである。

① 生鮮野菜

生鮮野菜の輸入量は、はくさい 1271 トン（前年比 224%）、キャベツ 2 万 2566 トン（前年比 192%）、さといも 2196 トン（同 146%）、かぼちゃ 7 万 574 トン（同 128%）、しょうが 1 万 5127 トン（同 114%）、たまねぎ 26 万 8665 トン（同 111%）など国内産が生育不良だった品目を中心に輸入量が大幅に増えた。一方でジャンボピーマン 1 万 9679 トン（同 79%）は主要輸入相手国の韓国が日本向け輸出の奨励金を廃止し、他国向けに力を入れている事やミニトマトに生産をシフトしていること等から輸入量が大幅に減り、全体では 70 万 6293 トン（同 108%）となった（図 6）。

図 6 生鮮野菜の月別輸入量の推移

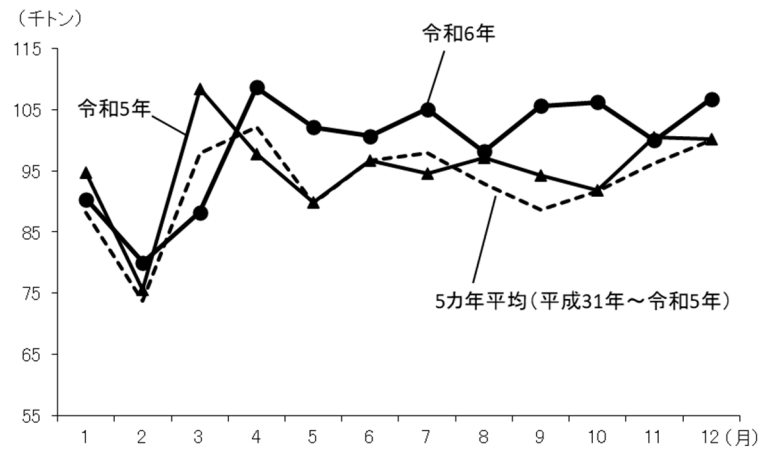


資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

② 冷凍野菜

冷凍野菜の輸入量は、ブロッコリー7 万 9632 トン（前年比 112%）、ほうれんそう等 5 万 7069 トン（同 111%）、スイートコーン 5 万 142 トン（同 108%）、いちご 3 万 500 トン（同 108%）、混合冷凍野菜 2 万 3855 トン（同 106%）、ばれいしょ 42 万 3652 トン（同 102%）など外食向け、家計消費ともに需要のある品目で輸入が増え、年間では 119 万 1809 トン（同 104%）となった（図 7）。

図 7 冷凍野菜の月別輸入量の推移



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

(2) 野菜業務関係年表

年 月 日	事 項
令和6年10月1日	野菜価格安定対策費補助金交付等要綱一部改正
令和6年10月1日	野菜の産地強化計画の策定について一部改正
令和6年9月1日	野菜指定産地の指定等に係る留意事項について制定
令和6年4月12日 令和6年10月1日	指定野菜価格安定対策事業及び契約指定野菜安定供給事業の実施について一部改正
令和6年4月12日	野菜需給調整関係事務処理要領一部改正
令和6年4月1日 令和6年9月2日 令和6年10月1日	独立行政法人農畜産業振興機構業務方法書実施細則一部改正
令和6年10月4日	特定野菜等供給産地育成価格差補給助成金交付要綱一部改正
令和6年10月4日	野菜農業振興事業補助実施要綱一部改正
令和6年10月4日 令和7年3月27日	野菜緊急需給調整費用交付金交付事業実施要領一部改正
令和6年10月4日	契約野菜収入確保モデル事業補助実施要領一部改正
令和6年9月1日	特定野菜等供給産地育成価格差補給事業の適正な実施について
令和6年10月1日	野菜価格安定対策事業の推進について一部改正
令和7年3月31日	持続的生産強化対策事業推進費補助金等交付等要綱一部改正
令和7年3月31日	持続的生産強化対策事業実施要領一部改正
令和6年10月4日 令和7年3月25日	契約特定野菜等安定供給促進助成金交付要綱一部改正
令和6年8月30日	契約指定野菜安定供給事業における平均取引価額の再算定による追加交付に関する事務取扱規程制定
令和7年3月25日	野菜勘定における資金の管理等に関する細則一部改正
令和7年2月26日	野菜生産出荷安定法第4条第1項の規定による野菜指定産地の指定および同法第8条第1項の規定による生産出荷近代化計画の樹立について
令和6年8月30日	契約野菜収入確保モデル事業における平均取引価額の再算定による追加交付に関する事務取扱規程
令和6年8月30日	契約特定野菜等安定供給事業における平均取引価額の再算定による追加交付に関する事務取扱規程

### 3 砂糖業務

#### (1) 需給の概況

##### ア 海外の動向

##### (ア) 世界の砂糖需給の概況

2023/24年度<sup>(注1)</sup>における世界の砂糖生産量は、1億9573万トン（前年度比2.7%増）とわずかに増加した<sup>(注2)</sup>。地域別に見ると、南米では生産量第1位のブラジルでサトウキビ主産地が天候に恵まれたことなどから、前年度をかなりの程度上回った一方、アジアでは同第2位のインドが天候不順によるサトウキビの減産により、前年度をわずかに下回った。また、EUのてん菜では主産地であるドイツ、ポーランドなどの増産により、前年度からかなりの程度増加した。

同年度における世界の砂糖消費量は、1億9160万トン（同0.4%増）とわずかに増加した。消費量第1位のインドではスナック菓子市場の拡大やケータリングサービスの利用者増加に伴い、前年度からやや増加した。また、同第2位の中国やブラジルは前年度よりわずかに需要が回復した一方、EUや米国などは需要が落ち込んだ。

注：年度は国際砂糖年度（10月～翌9月）、砂糖の数値は粗糖換算。

##### (イ) 国際砂糖価格の推移

ニューヨーク粗糖先物相場（期近）の2024年4月～25年3月の動きを見ると、4月は、ブラジルやタイなど主要生産国の砂糖増産予測から下落基調となった。続く5月もブラジルの増産やインドのモンスーン早期到来から下落基調となったことから、1ポンド当たりの月平均価格は18.82セント<sup>(注)</sup>をつけた。

6月は、天候不順や病害発生によるインドの輸出量減少への懸念などから、一転して上昇基調となった。続く7月も世界的な砂糖余剰予測などにより下落圧力を受けたが、ブラジルやインドの供給不安などが上昇要因となり、同19.30セントをつけた。

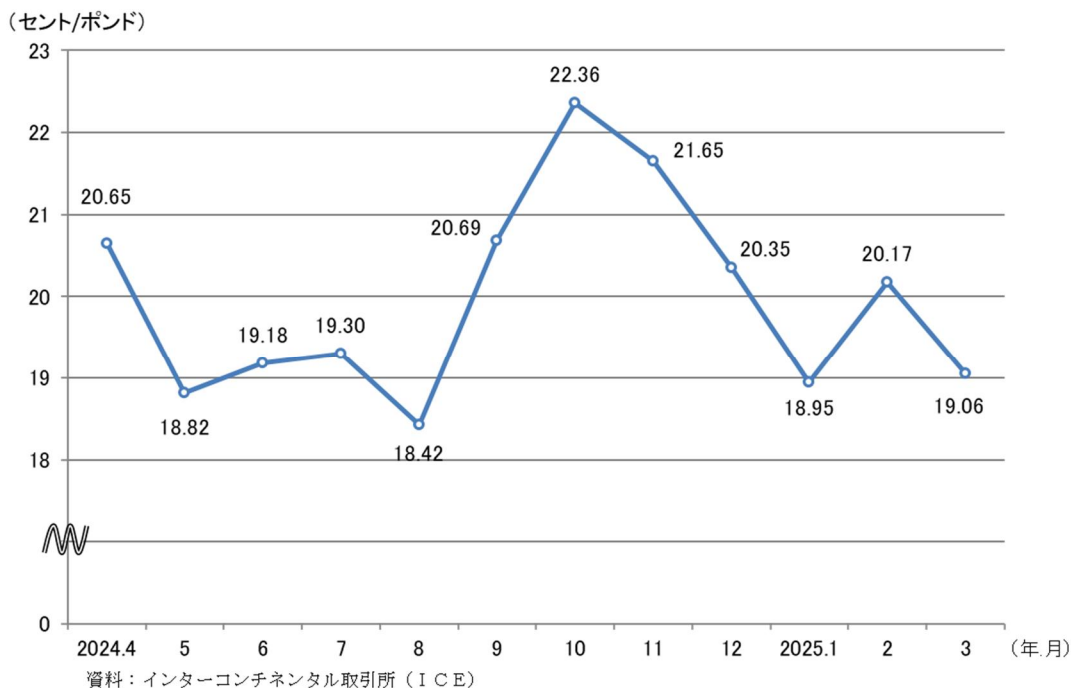
8月に入り、主要生産国の砂糖増産予測が相場を押し下げた結果、同18.42セントと下落したが、9月および10月は、原油高やブラジル中南部の減産予測などにより、10月には同22.36セントと上昇した。

11月は、ブラジルの供給見通しが定まらずに相場が変動したが、最終的には国際砂糖機関（ISO）による砂糖不足の予測値引き下げやリアル安により下落した。続く12月もブラジルの砂糖増産予測とインドの砂糖輸出に対する期待の高まりから、同20.35セントまで下落し、25年1月も砂糖の供給増加の見通しとドル高により同18.95セントとさらに値を下げた。

2月は、ブラジルの干ばつによる供給不足の懸念などから、同20.17セントと上昇した一方、3月は、ブラジル中南部やインドの減産予測などから、同19.06セントと下落した（図8）。

注：1ポンドは約453.6グラム。

図8 ニューヨーク粗糖先物相場（期近）の月別平均価格の推移



## イ 国内の動向

### (ア) 需給の動向

令和5年産のてん菜は、作付面積は前年産に比べて7.4%（4101ヘクタール）減少し、5万1081ヘクタールとなった。作柄については、生育期間中の気温が総じて平年より高く推移し、1ヘクタール当たりの収量は平年並みとなる一方、褐斑病の多発により、根中糖分が著しく低下したことから、てん菜の生産量は同4.0%減の340万2659トンとなった。産糖量については、歩留りが前年産から2.72ポイント減の13.15%となったことから、同20.4%減の44万7537トンと前年を大幅に下回り、昭和61年の糖分取引開始以降で最も少なくなった。

令和5年産のさとうきびは、収穫面積は前年産比2.5%減の2万2666ヘクタールで、作柄については、一部の島において、春から夏にかけて干ばつがあったことや台風の襲来などに伴い、生産量は同7.1%減の118万823トンとなった。産糖量は、沖縄県は前年産から5.9%の減少となった一方で、鹿児島県は前年産から1.3%の増加となり、全体の生産量としては同2.8%減の14万2375トンとなった。

国内産糖に輸入糖を加えた令和5砂糖年度（令和5年10月～令和6年9月）の砂糖供給量は、前年度比0.7%減の174万9000トン、砂糖消費量は、同0.2%減の177万7000トンとなった。

異性化糖の消費量及び供給量（標準異性化糖換算）は、前年度比0.7%増の77万2000トンとなった。

令和6事業年度（令和6年4月～令和7年3月）の加糖調製品の輸入量は、「ココア調製品」が前年度比0.6%減の7万8475トン、「調製した豆（加糖あん）」が同3.0%増の3万8450トン、「粉乳調製品」が同4.0%増の9万

9606 トン、「ソルビトール調製品」が同 3.0%減の 10 万 3232 トンとなった（表 2）。

表 2 加糖調製品の輸入量の推移

(単位：トン、%)

	令和4事業年度		令和5事業年度		令和6事業年度	
	数量	増減率	数量	増減率	数量	増減率
ココア調製品	104,791	5.7	78,954	▲ 24.7	78,475	▲ 0.6
調製した豆（加糖あん）	41,035	▲ 15.7	37,335	▲ 9.0	38,450	3.0
粉乳調製品	118,160	▲ 14.4	95,807	▲ 18.9	99,606	4.0
ソルビトール調製品	112,618	7.7	106,398	▲ 5.5	103,232	▲ 3.0

資料：財務省「貿易統計」

(イ) 砂糖類の国内価格の推移

令和 6 事業年度（令和 6 年 4 月～令和 7 年 3 月）における砂糖類の価格（日経相場、東京、大袋）は、前年度末から変動はなく、3 月末時点で上白糖 1 キログラム当たり 249～251 円、本グラニュー糖は同 254～256 円であった。

異性化糖の大口需要家向け価格（果糖分 55%、東京・タンクローリーもの）は、前年度末から 2 円程度値上がりし、同 174～175 円で推移した。

(2) 国内産糖の生産動向（令和 6 年産）

ア てん菜糖

(ア) てん菜の生産

a 生産概況

てん菜の作付農家戸数は全道的に減少傾向が続いており、令和 6 年産は前年産比 4.2%減の 5973 戸となった。作付面積は同 4.4%減の 4 万 8847 ヘクタールと減少した。

このうち直播作付面積は、春の育苗・移植作業に要する労働力を大幅に削減できることから、近年直播栽培に取り組む地域が増加し、同 8.6%増の 2 万 4587 ヘクタールとなり、作付面積全体の 50.3%となった。

1 戸当たりの作付面積は、同 0.2%減少の 8.18 ヘクタールと減少した。

生産量は、1 ヘクタール当たりの平均収量が同 7.1%増の 71.34 トンと過去最高となった結果、同 2.4%増の 348 万 4827 トンと増加した。

根中糖分は昭和 61 年の糖分取引開始以降最低となった前年よりも 2.0 ポイント回復したものの、高温や褐斑病の発生の影響は引き続き継続しており、平年を下回る 15.7%となった。

b 生育概況

移植用の苗の播種は最盛期が令和 6 年 3 月 9 日と平年と同日であった。移植

始は4月24日で平年より1日早く、移植最盛期は5月2日で平年と同日、移植終は5月10日と平年より1日遅く、定植作業は順調であった。

また、直播の播種は播種始が4月20日と平年より1日遅く、最盛期は平年より1日遅い4月27日となった。

移植定植作業及び直播の播種は、概ね順調に推移した。播種・定植作業直後は強い低温にさらされたが、その後の気温は高めに経過したことから活着は良好であった。

その後、高温傾向が続き、降水量・日照時間も概ね平年並みで経過したため、生育は順調に推移し、根部肥大が進んだ。

最終的に、移植では、収穫期直前の10月15日の生育は、全道平均で8日早かった。また、直播では、檜山地域を除き2日から6日早く、全道平均では4日早かった。

病害虫の発生状況について、ヨトウガは平年並み、シロオビノメイガの発生が8月中旬頃から確認され茎葉に一部食害が見られるようになった。

褐斑病について、初発が前年より遅く、病勢の進展も遅かった。9月以降徐々に病勢が散見されるようになったが、最終的な発病程度は前年より低い水準となった。

#### (イ) てん菜糖の生産

歩留りは前年産より2.4ポイント増の15.5%となり、産糖量は同20.7%増の54万250トンとなった。このうち原料糖は同76.0%増の12万8780トンと増加し、産糖量に占める割合は同7.4ポイント増の23.8%となった。

### イ 甘しや糖～鹿児島県産～

#### (ア) サトウキビの生産

##### a 生産概況

作付農家戸数は前年産より減少し、令和6年産は前年産比2.6%減の6078戸であった。一方、収穫面積は昨年よりわずかに増加し同0.7%増の9566ヘクタールとなった(表3)。この結果、1戸当たりの収穫面積は同3.3%増の1.57ヘクタールとやや増加した。

作型別の収穫面積は表3のとおりである。

表3 作型別の収穫面積

(単位：ヘクタール)

作型	令和6年産	(参考) 令和5年産
夏・秋植え	953 (10.0%)	1,003 (10.6%)
春植え	1,445 (15.1%)	1,580 (16.6%)
株出し	7,168 (74.9%)	6,920 (72.8%)
合計	9,566 (100.0%)	9,502 (100.0%)

資料：鹿児島県調べ

注1：( )内は構成比。

注2：合計は四捨五入の関係で必ずしも一致しない。

10アール当たりの平均収量は、前年産比7.4%増の5840キログラムとなり、平年比でもかなりの程度増加した。島別の10アール当たりの平均収量は表4に示すとおりである。

なお、平年値は過去7年（平成29年～令和5年）の中庸5年の平均である（以下同じ）。

表4 10アール当たりの平均収量

(単位：キログラム)

島名	令和6年産	(参考) 令和5年産	平年(7中5)
種子島	6,898 (平年比115.4%)	6,115	5,975
奄美大島	4,786 (同 100.8%)	4,918	4,747
喜界島	4,946 (同 90.2%)	5,573	5,483
徳之島	5,502 (同 105.6%)	5,231	5,209
沖永良部島	6,054 (同 116.5%)	5,095	5,195
与論島	5,872 (同 98.5%)	4,834	5,961
鹿児島県全域	5,840 (同 107.2%)	5,436	5,445

資料：鹿児島県調べ

生産量は前年産比8.2%増の55万8683トンとかなりの程度増加した。島別の生産量は表5に示すとおりである。また、買入甘しや糖度は前年産より1.3度低い13.85度となり、平年値の14.02度との比較ではわずかに下回る結果となった。

表5 サトウキビ生産量

(単位：トン)

島名	令和6年産	(参考)令和5年産	平年(7中5)
種子島	161,354 (平年比 121.0%)	141,589	133,346
奄美大島	26,651 (同 100.3%)	27,551	26,563
喜界島	67,121 (同 90.6%)	76,116	74,065
徳之島	172,944 (同 101.7%)	165,063	170,047
沖永良部島	106,867 (同 124.9%)	86,623	85,525
与論島	23,745 (同 99.0%)	19,597	23,985
合計	558,683 (同 107.5%)	516,539	519,491

資料：鹿児島県調べ

## b 生育概況

## (a) 種子島地域

3～6月の平均気温が平年より高かったことから春植えや株出しの萌芽はおおむね良好であった。その後も高温・多照・適時降雨など気象条件に恵まれたことから順調に生育した。

伸長期は高温・多照で推移したことから、仮茎長、伸長量ともに平年以上であった。しかし、8月28～29日にかけて台風10号が襲来し、葉先の裂傷や倒伏などの被害を受けたものの、その後、順調に生育した。

登熟期は、期間を通して気象条件に恵まれ、生育量は平年並みであったが、11月中旬まで高温で推移したことにより登熟が遅れ、最終的な平均買入糖度は、12.69度となった。

## (b) 奄美地域

生育初期の降雨量は平年より多かったものの、高温・寡照で推移したため、生育はやや緩慢であったが、平年並みの生育であった。

伸長期は、降水量が少なく干ばつ傾向にあったが、台風による降雨により解消し、平年並みの生育となった。しかし、喜界島は、台風10号、同13号による葉部裂傷や倒状からの回復が遅れたことから、平年に比べ生育は劣った。

登熟期は、11月中旬まで高温・多雨で推移したことから、ほとんどの島で生育期は平年並みもしくは平年以上であったが、登熟が遅れ、最終的な買入糖度は、14.33度となった。

## (イ) 甘しや糖の生産

サトウキビの生産量は前年産を上回ったものの、産糖歩留りが前年産比0.85ポイント減の11.47%となったことから、甘しや糖の生産量は同0.8%増の6万3520トンとなった。

## ウ 甘しや糖～沖縄県産～

(ア) サトウキビの生産

a 生産概況

作付農家戸数は漸減傾向で推移しており、令和5年産は前年産比10.4%減、令和6年産は同3.7%減の1万1514戸となった。一方、収穫面積は同2.4%増の1万3484ヘクタールとわずかに増加した(表6)。また、1戸当たりの収穫面積は、前年から0.07ヘクタール増加の1.17ヘクタールとなった。

作型別の収穫面積は表6のとおりである。

表6 作型別の収穫面積

(単位：ヘクタール)

作型	令和6年産	(参考) 令和5年産
夏植え	3,050 (22.6%)	2,774 (21.1%)
春植え	1,212 (9.0%)	1,289 (9.8%)
株出し	9,222 (68.4%)	9,101 (69.1%)
合計	13,484 (100.0%)	13,164 (100.0%)

資料：沖縄県調べ

注：( ) 内は構成比。

10アール当たりの平均収量は、前年産比24.2%増の6267キログラムと、前年産から大幅に増加した。地域別の平均収量は、表7に示すとおりである。

表7 10アール当たりの平均収量

(単位：キログラム)

島名	令和6年産	(参考) 令和5年産	平年(7中5)
沖縄地域	6,145 (平年比112.4%)	4,607	5,465
宮古地域	6,450 (同115.1%)	5,347	5,601
八重山地域	6,046 (同101.4%)	5,467	5,962
沖縄県全域	6,267 (同112.8%)	5,046	5,552

資料：沖縄県調べ

生産量は、前年産比27.2%増の84万5112トンと、大幅に増加し、平年と比較しても13.0%増加となった。地域別の生産量は表8に示すとおりである。また、買入甘しや糖度は前年産14.58度を下回る13.66度となり、平年値14.35度と比較してもやや下回る結果となった。

表8 サトウキビ生産量

(単位：トン)

島名	令和6年産	(参考) 令和5年産	平年(7中5)
沖縄地域	340,092 (平年比 107.3%)	259,274	316,760
宮古地域	389,838 (同 121.0%)	310,264	322,108
八重山地域	115,182 (同 101.5%)	94,746	113,446
合計	845,112 (同 113.0%)	664,284	747,676

資料：沖縄県調べ

## b 生育概況

## (a) 沖縄地域

本島地域及び周辺地域においては、生育初期は多雨傾向であり生育はおおむね順調に推移したが、梅雨明け以降の7～8月は少雨傾向となった。9月以降の生育後期は降水量が多く、生育は順調に推移したが、一方で日照時間は平年を下回った。台風による被害は特に見られなかった。

大東地域においては年間を通して少雨傾向であったが、生育旺盛期には台風などにより適度な降雨が見られ、台風の被害も特に見られなかったことから生育は順調に推移した。

## (b) 宮古地域及び八重山地域

宮古地域においては、生育初期の4～6月の降水量は平年値を大きく上回り、7月は少雨傾向にあったが、その後の台風3号の接近による降雨で干ばつが回避され、被害も軽微であった。生育後期も適度な降雨があり、気温も平年値より高くなったことなどにより生育は順調に推移した。

八重山地域では、生育初期は少雨傾向であったが、4～5月に降水量が平年値を上回った。梅雨明け以降は干ばつ状況であり、春植えや株出しの作型において生育への影響が見られたが、台風3号の接近による降雨で生育の回復が見られ、台風被害も葉片裂傷のみであった。その後も平年並みの降雨があり、10月の台風21号の接近もあったが、被害も軽微であったため、生育は順調に推移した。

## (イ) 甘しゅ糖の生産

産糖歩留りは前年産比0.4ポイント減の11.3%となったものの、サトウキビの生産量が前年産を上回ったことから、甘しゅ糖の生産量は同22.6%増の8万6878トンとなった。

## (3) 砂糖調整基準価格

機構業務の基礎となる令和6砂糖年度に適用される砂糖調整基準価格については、価格調整法第3条第1項の規定に基づき、食料・農業・農村政策審議会(甘味資源部会)の意見を令和6年9月12日に聴取した上で同年9月30日に次のように告示された。

- 砂糖調整基準価格 1,000キログラムにつき153,200円  
(153,200円)

注：( ) 内は令和5砂糖年度の価格である。

(4) 砂糖業務関係年表

年 月 日	事 項
令和6年4月11日	令和5砂糖年度第3回国内産原料糖入札取引
令和6年4月17日	令和5砂糖年度第3回輸入指定糖入札取引
令和6年7月11日	令和5砂糖年度第4回国内産原料糖入札取引
令和6年7月17日	令和5砂糖年度第4回輸入指定糖入札取引
令和6年9月13日	令和6砂糖年度・令和6でん粉年度における価格調整制度の各種指標の決定について（プレスリリース）
令和6年9月30日	令和6砂糖年度指標価格等告示
令和6年10月10日	令和6砂糖年度第1回国内産原料糖入札取引
令和6年10月16日	令和6砂糖年度第1回輸入指定糖入札取引
令和6年12月11日	令和7年産さとうきび・でん粉原料用かんしょに係る生産者交付金の単価の決定について（プレスリリース）
令和6年12月28日	令和7年産に収穫されるさとうきびに係る甘味資源作物交付金の単価告示
令和7年1月9日	令和6砂糖年度第2回国内産原料糖入札取引
令和7年1月15日	令和6砂糖年度第2回輸入指定糖入札取引

4 でん粉業務

(1) 需給の概況

ア 海外の動向

(ア) 世界のでん粉原料作物の概況

2023/24年度（9月～翌8月）の米国のトウモロコシ生産量は、作付面積の拡大と単収の増加により前年度を上回る153億4100万ブッシェル（3億8968万トン<sup>（注）</sup>、前年度比12.4%増）となった。

同年度（10月～翌9月）のタイのキャッサバ生産量は、天候不順による渇水および洪水被害やキャッサバモザイク病の発生拡大により2862万トン（同6.5%減）となった。

注：1ブッシェルは約25.401キログラム。

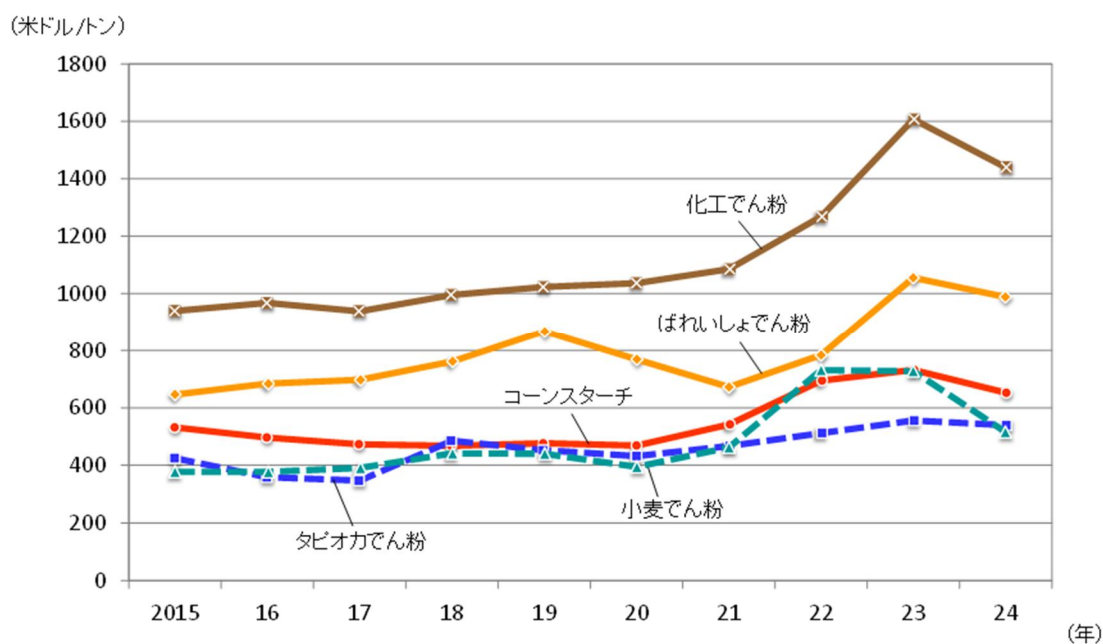
(イ) 世界のでん粉の概況

2024年の世界のでん粉生産量は4997万7000トン（前年比3.0%増）と前年をやや上回った。生産量の内訳は、コーンスターチが2333万9000トン（全体の約47%）と最も多く、次いで、タピオカでん粉が1072万トン（同21%）、化工でん粉が968万6000トン（同19%）、小麦でん粉が336万5000トン（同7%）、ばれいしょでん粉が196万6000トン（同4%）となっている。同年の世界のでん粉消費量は4991万7320トン（前年比2.6%増）と前年をわずかに上回った。消費量の内訳は、生産量の内訳とほぼ一致している。

#### （ウ）品目別でん粉の輸出価格

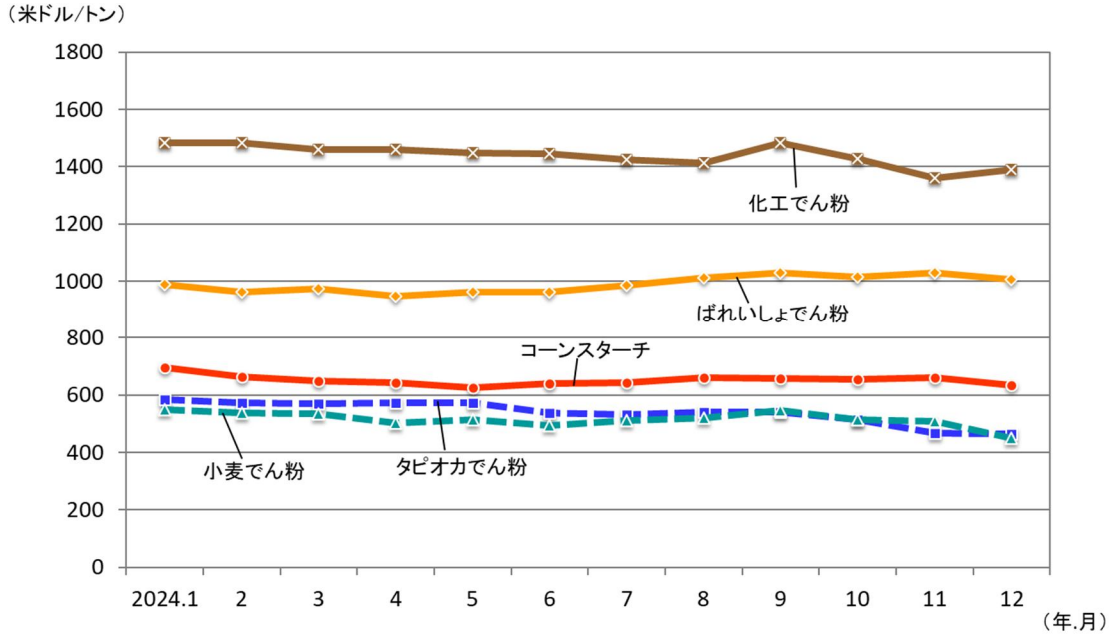
でん粉は、以前より需要に応じた生産・供給が行われている。また、価格は需給より原料価格変動の影響を受ける傾向が強いとされている。近年、各種でん粉の輸出単価（世界平均：米ドル換算）は上昇傾向にあったが、24年はいずれの品目も前年を下回った（図1）。このうち、コーンスターチおよび小麦でん粉は、原料となるトウモロコシや小麦の主要輸出国の収穫量が十分であったため、輸出価格の上昇が抑えられた。ばれいしょでん粉は、23年末のばれいしょ収穫量増加により24年はかなりの程度価格を下げた。タピオカでん粉は、主要輸入国である中国での輸入先国の変更などが影響し下落した。24年の月間輸出単価を見ると、ばれいしょでん粉では一時的には上昇したものの、すべての品目で横ばいまたは下落傾向にある（図2）。

図1 品目別でん粉の輸出単価の推移（2015年～24年）



資料：Global Trade Atlas

図2 品目別でん粉の輸出単価の推移（2024年）



資料： Global Trade Atlas

#### イ 国内の動向

令和5年産のでん粉原料用ばれいしょについては、北海道における8月中旬以降の酷暑により、でん粉含有率の低下が生じたことから、ばれいしょでん粉の生産量は前年産比2.6%減の15万1000トンとなった。

また、でん粉原料用かんしょについては、産地でのサツマイモ基腐病の発生面積は減少したものの、他用途向けとの原料の競合の影響により、かんしょでん粉の生産量は同26.7%減の1万1000トンとなった。

令和5でん粉年度（令和5年10月～令和6年9月）におけるでん粉の供給量は、前年度比2.8%減の239万4000トン、需要量は同2.8%減の238万7000トンといずれもわずかに減少した。

令和6事業年度（令和6年4月～令和7年3月）におけるコーンスターチ用とうもろこしの輸入量は、前年度比1.6%減の295万5992トンであった。天然でん粉の輸入量は、タピオカでん粉が同8.9%減の11万2384トン、サゴでん粉が同2.3%減の1万6765トン、ばれいしょでん粉が同77.7%増の1万7685トン、コーンスターチが同17.1%増の3600トン、小麦でん粉は1675トン（前年度は輸入実績なし）、その他でん粉が同30.9%増の1812トンであった。また、化工でん粉の輸入量は、でん粉誘導体が同0.9%減の38万9965トン、デキストリンが同14.4%増の1万4546トン、膠着剤及び仕上剤などが同6.0倍の429トンであった（表9）。

表9 コーンスターチ用とうもろこし及びでん粉の輸入量の推移

(単位：トン、%)

		令和4事業年度		令和5事業年度		令和6事業年度	
		数量	増減率	数量	増減率	数量	増減率
コーンスターチ用 とうもろこし		3,063,561	3.3	3,002,812	▲ 2.0	2,955,992	▲ 1.6
天然 でん粉	タピオカでん粉	131,866	6.5	123,305	▲ 6.5	112,384	▲ 8.9
	サゴでん粉	17,304	24.3	17,167	23.3	16,765	▲ 2.3
	ばれいしょでん粉	9,303	4.7	9,954	7.0	17,685	77.7
	コーンスターチ	2,391	▲ 21.5	3,075	28.6	3,600	17.1
	小麦でん粉	-	-	-	-	1,675	-
	その他でん粉	1,563	14.0	1,384	▲ 11.5	1,812	30.9
化工 でん粉	でん粉誘導体	420,788	▲ 2.1	393,681	▲ 6.4	389,965	▲ 0.9
	デキストリン	13,652	▲ 20.1	12,714	▲ 6.9	14,546	14.4
	膠着剤及び仕上剤 など	348	64.1	72	▲ 79.3	429	498.1

資料：財務省「貿易統計」

注：「-」は実績のないもの。

(2) 国内産いもでん粉の生産動向（令和6年産）

ア ばれいしょでん粉

(ア) ばれいしょの生産

北海道の令和6年産ばれいしょの作付面積は前年産並みの4万8700ヘクタール、1戸当たりの作付面積は前年産比3.9%増の5.3ヘクタールであった。

作柄については、春先の播種作業や萌芽は順調に推移した。7月に入り高温・干ばつ傾向で推移したものの、令和5年産とは異なり、8月以降夜温が低下してばれいしょに合った気候となり、全道的に生育は順調に推移した。

1ヘクタール当たりの平均収量は前年度比3.5%減の38.4トン、ばれいしょ生産量は前年度比3.1%減の187万トンとなった。そのうち、でん粉原料用ばれいしょは前年度比0.9%増の76万1000トンとなった。

(イ) ばれいしょでん粉の生産

ばれいしょでん粉の生産量は、8月中旬以降、北海道の気温が低下したため、でん粉含有率が回復したことから、歩留りが20.8%と前年産から0.9ポイント上昇したため、前年産比5.3%増の15万8000トンとなった。

イ かんしょでん粉

(ア) かんしょの生産

鹿児島県及び宮崎県の令和6年産のかんしょの作付面積は前年産比0.8%減

の1万2700ヘクタールとわずかに減少し、作付農家戸数は同2.6%減の7400戸となった。この結果、1戸当たりの作付面積は、同2.4%増加の1.72ヘクタールとわずかに増加した。しかし、内数であるでん粉原料用かんしょの作付面積は、同11.9%減の1630ヘクタールとかなり大きく減少した。生産量は、前年産比4.0%増の29万5600トンとやや増加したが、この内数であるでん粉原料用かんしょについては同6.5%減の3万7600トンとかなりの程度減少した。

生産量の減少率が作付面積の減少率を下回ったことから、1ヘクタール当たりの平均収量は、同6.5%増の23.1トンとかなりの程度増加した。

(イ) かんしょでん粉の生産

かんしょでん粉の生産量は、サツマイモ基腐病の発生面積が減少し、歩留りは29.4%と前年産から0.3ポイント増加したが、他用途向けとの原料の競合の影響により、前年産比9.1%減の1万トンとなった。

(3) でん粉調整基準価格

機構業務の基礎となる令和6でん粉年度に適用されるでん粉調整基準価格については、価格調整法第26条第1項の規定に基づき、食料・農業・農村政策審議会(甘味資源部会)の意見を令和6年9月12日に聴取した上で同年9月30日に次のように告示された。

- でん粉調整基準価格 1,000キログラムにつき 182,240円  
(179,340円)

注：( )内は令和5でん粉年度の価格である。

(4) でん粉業務関係年表

年 月 日	事 項
令和6年9月13日	令和6砂糖年度・令和6でん粉年度における価格調整制度の各種指標の決定について(プレスリリース)
令和6年9月30日	令和6でん粉年度指標価格等告示
令和6年12月11日	令和7年産さとうきび・でん粉原料用かんしょに係る生産者交付金の単価の決定について(プレスリリース)
令和6年12月28日	令和7年産のでん粉の製造の用に供するかんしょに係るでん粉原料用いも交付金の単価告示